PRESS RELEASE (2015/3/31)

北海道大学
HOKKAIDO UNIVERSITY
北海道大学総務企画部広報課
〒060-0808 札幌市北区北８条西５丁目
TEL 011-706-2610　FAX 011-706-2092
E-mail: kouhou@jimu.hokudai.ac.jp
URL: http://www.hokudai.ac.jp

当別町産セイウチ科骨格化石の寄託契約締結式

北海道大学総合博物館と当別町は平成２７年３月３０日（月）当別町役場において，当別町産セイウチ科骨格化石の寄託契約締結式を行いました。

締結式のポイント

・北海道で最も完全なセイウチ化石を北海道大学総合博物館に寄託する。
・他機関と連携しながら，学術研究を進め，セイウチ化石の進化を明らかにする。
・将来的には，北海道大学総合博物館で展示を行う予定であり，教育に利活用する。

当別産セイウチ化石の概要

歴史的背景

1977年，北海道当別町の上流を流れる当別川にて（図1），大型化石が含まれる岩塊が発見・収集されました。1998年，本研究を行った甲能直樹研究主幹（国立科学博物館）によって頭蓋を含むセイウチ化石である可能性が示唆され，1999年から国立科学博物館にて化石を岩から取り出す本格的な剖出作業が始まりました。2006年から田中嘉寛（当時北海道大学大学院理学院）が剖出作業を行い，セイウチ化石の研究を行いました。

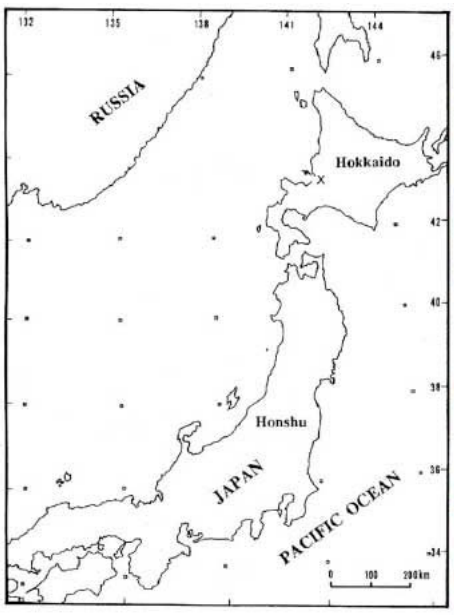

図1：（左）セイウチ科化石の産地（×印），（右）化石産地（当別川上流）

図2：母岩に含まれている状態のセイウチ化石。上半身がうつぶせで保存されている。

化石の重要性

当該標本（図2）は初期のセイウチ科に属する絶滅したセイウチです。時代は中新世後期でおよそ1,000～950万年前です。現生のセイウチは特徴的な長いキバを持ちますが，当該標本のキバは短く（図3），短いながらも太く大きく，後頭部の筋肉が付着する部分がよく発達しているため，雄であったと判断されます。また，頭蓋骨の縫合線の癒合程度から亜成獣と考えられます。体長は2.8～3メートル，体重はおよそ400～475キログラムで，現代のトドとオタリアの中間的な体格であったと推測されます。また，現生のセイウチのような吸引食には向かない口蓋と歯の形を持っており，魚食であったと推測されます。

2006 年には，甲能研究主幹によって当別町から産出していた別のセイウチ化石の論文が古脊椎動物学雑誌から出版され，*Pseudotaria muramotoi*（シュードタリア　ムラモトアイ）と命名されています。当該標本は，当別町からは 2 例目となりますが，形態的に区別され，系統分類学的にみてその位置付けが異なり，セイウチ科の新属新種であると考えられます。

図3：新たな当別セイウチ化石の復元図　新村龍也氏（足寄動物化石博物館）提供

今後の展開

現在，寄託された標本は，研究が進められています。当該標本は詳細に記載され，系統解析を行っています。これによって，セイウチ科の新属新種であることが明らかとなるかもしれません。系統解析により，当該標本がセイウチ科鰭脚類の系統進化史上において重要な意味を持つことがわかる可能性が高くなります。

また，寄託された標本は，将来的には北海道大学総合博物館で展示される予定です。

お問い合わせ先

所属・職・氏名：北海道大学総合博物館　准教授　小林　快次（こばやし　よしつぐ）
TEL：011-706-4730　FAX：011-706-4730　E-mail：ykobayashi@museum.hokudai.ac.jp